

十和田から函館まで

7月19日

夜行の疲れも取れ、清々しい朝をむかえた。しとしとと小雨煙る日だったが、私達の心ははずんでいた。遊覧船に乗れるからだ。一年中美しい水の色を呈する湖を眺めることの、素晴しさは最高だった。始めは西湖から中山半島を次に御倉半島を巡つていつた。女性的な美しさから男性的な雄大さへと次々に、私達を魅了した。特に印象深いのは、中山崎にあつた見返りの松である。今も目を閉じれば思い出すことが出来る。中湖の鳥帽子岩、五色岩など、変つた岩を眺め東湖を子ノ口へ出て船を降りた。十和田湖の水の美しさは、故九条武子夫人が、「浪汗の玉をとかしてまだ足らず、なにを秘めたるこの湖の色」とよんでおられるように、それは私達によつても、いつまでも忘れられないものだろう。十和田湖より流れる奥入瀬川の溪流美を、バスの両側に感嘆しながら眺めていたが、ついにバスから降りて、歩きだした。全く素晴らしい景色だ。緑の中に岩や滝の数々……。誰れかが言つていた「いつか素晴らしい人と、この道を歩こう。」なんて。高くそびえる岩から白いしぶきをあげて流れ落ちる。男性的な滝、絹糸の様に細く白く美しい女性的な滝、細々と静かに糸をひく年老いた滝、そしてバスの行く手には小さな橋があり、そこを渡るごとに、流れも、滝も、右に左にと変る。左右両側に公平に美を呈する奥入瀬溪流である。奥入瀬に名残りを惜しみつつ、バスは蕨温泉へと向つた。そこで昼食を取り、午後は又バスに乗り、八甲田連峰へと走つた。窓からはいつてくる冷気が肌をさし、ついうとうととする私達を目ざめさせた。この辺りから木々が変つた。松の針葉樹林、その間所々に、白樺を思わせるダケカンバなど、そしてそれらの木々の上の方に、スキー客の道しるべらしい三角の番号札が並んでいた。雪の十和田も是非訪れたいものだ、と話し合つた。朝から降っている雨の為か、あたり一面霧で、折角の八甲田連峰の頂上も、辺りの景色も、見られなかつた。くやしまぎれに歌をうたつていたが、長いバス道中、眠る者が続出した。高山植物園についた頃は、空も晴れ、気分も良かつた。植物園という人工美より大自然の美に憧れていた私達の目を、充分に楽しませてくれた。バスは四時半に青森に着いた。北海道への連絡船に乗る為に、二時間程待つて、船に乗り込んだ。ドラの音と共に赤青黄のテープがなげられるうちに、船は棧橋を離れた。

次々に遠くなつていく本州の灯を見つめていると、何故か私達も感慨深げになつた。船

底で夕食をとり、しばらくすると船は揺れ出した。皆な寝ころんだり、雑誌を読んだり、歌声をはりあげたり、トランプをしたり・・・

いつのまにか寝ていた者も起き出して、十時五〇分、船は函館港につき、夢にまで描いた憧れの北海道の土を踏んだのである。港からバスで二〇分、今夜の宿である湯の川温泉に着いた。

函館から釧路へ

7月20日

大食三回生

湯の川温泉で一夜をあかした一行は9時30分北海道の海の玄関口である函館市内の見学のためバスに乗りこんだ。醜い座席争いをさけるため、大食3乗車のバスは席の順番を決め、座席とりに夢中になっている2台のバスをしりめにゆうゆうと乗車する。さすが大食3の貫録十分である。

最初の訪門地は沈黙・労働・祈禱の生活をおくるトラピスト修道院。ガイドさんの説明より修女の生活を想像しながら五稜郭へ。うす曇りの市内は京都より大分すずしい。啄木墓碑をバスの中より訪ね立待岬へと向う。ここでバスはUターンして函館山ドライブウェイと入ってゆく。

展望台からのながめは霧のためはつきり見る事が出来ず、記念写真も霧の晴れるのを待つて撮影する。

昼食の後準急“ポプラ”で小樽に行き、そこから鈍行で“濃霧の街”釧路へと向う。途中、大沼国定公園では車掌の名ガイドぶりに耳を傾ける。しかし、駒ヶ岳の美しい姿を望むことはできなかつた。

汽車が長万部に停るや否や売店にとびこんだが“ケガニ”は売切れ、ガツカリした面々……。北海道での目的の一つであつたケガニを食べそこねたのである。

汽車の中で一夜をあかした。4時すぎ目をさます。今日は北海道で皆既日食の観測できる日である。今日と云う日をのがせば我々が66才になるまで見る事ができないのである。汽車の窓より日の出を待つたが低くたれこめた雲は空をおおい私達を失望させた。京都より持参した“イブシガラス”がうらめしかつた。ケガニにつき2度目の失望である。